



熱量 1 枚の絵画が放つ LOVE STORY

第2章 レッドクレ-



凜子@ローマ

世界の観光都市ローマに入る。

倒産や買収の憶測が飛び交うアリタリア航空のビジネスクラスは、機内食が伝統的なイタリアンでワインが豊富だ。

凜子は、外資系ホテルチェーンとアリタリア航空の共同 PR の仕事で5月中旬にローマ入り。

アジアをターゲットに観光客をさらに誘致するのが狙いだ。

この季節、イタリアの気候は素晴らしく、陽光が降りそそぐ深緑が眩しい。

イタリア語はあまり得意ではないが、クライアントは英語可なので何とか切り抜けられそうだ。

アリタリアのクルーと共に送迎バスに乗り込みローマ本社に。

チェントロ内の揺れは相変わらずだ。

あー「Bonci」のスクエアカットされたピザが食べたい。

ローマに来るたびにまずはこのピザをテイクアウトする。

ディナーはだいたい21時～、ピザを数種類堪能しても十分消化する。

荘厳な石造りの建物に入ると大理石のフロア。Gucci デザインのユニフォームを纏うアリタリアのスタッフが行き交う。

アンティークなエレベータに乗り込み3Fに。

(ヨーロッパはエレベータの階数表記が日本と異なるので頭を切り替える。)

案内されたミーティングルームはジウジアーロのインテリアがイタリア流だ。

まるでレーシングシートのような真っ赤な椅子は、カラダ全体が包み込まれるような感覚。さすがイタリアンオフィスだ。

ホテル、アリタリア、ローマ観光局それぞれのアジア担当スタッフと顔合わせを済ませ、明日からロケーションハンティングだ。

このプロジェクトは、アリタリアからエアフォース出身のマッテオに、CA 出身のラウラ。ホテルからは広報のリンダ、サルディ。

そして凜子とカメラマン兼通訳のサトルが担当する。

(サトルは外資系企業専門のカメラマンで、数か国を通訳する国際的な日本人だ。)

「凜子、移動はトラム？」

「レンタバイクはある？」

「え???国際免許証はある？」

「もちろん。各国どこでもロケハンバイク移動が便利だから。できれば中型以上で。」

「俺の KAWASAKI は?クルマはアウトビアンキがあるし NAVI 付で外ナンバーだ。」

「perfetto! grazie mille」

サトルはキーを凜子に渡す。

さっそく Bonci のピザだ。

「凜子!夕食はナボナ広場近くのリストランテに 21 時。ホテルに迎えに行くね。」

「ありがとう。」

バイクは快適だ。外ナンバーは止められることがない。

街中にテニスのローマオープンのフラッグがなびいている。ATP マスターズ 1000 はグラドスラムに次ぐ大きな大会だ。

ローマの街を流し、Bonci のピザをテイクアウト。ホテルに戻る。

エントランスにバイクを停めて、ヘルメットをはずすと一斉に視線を浴びる。

アジア人が大型バイクでホテルに入るのは珍しいようだ。

ドアマンにキーを預け部屋に入る。

典型的なヨーロッパのホテルで、キングサイズのベッドに天井と壁に天使が描かれ、かなりローマを意識している……

冷蔵庫に並ぶ CON GAS 表記のミネラルをグイッと飲み干す。

ベルニーニの噴

夕食は Piazza Navona (ナヴォーナ広場) にあるレストランテ。

マッテオ、ラウラ、サトルとローマの味覚を堪能する。

サルティンヴォッカ、アーティチョーク、スップリ、ニョッキ、牛テールの煮込み、ブルスケッタ。

ワインはフラスカーティにモンテフィアスコネ、サッシカイア、バローロとワイン好きのチョイス。食後にアマーロを。

デザートはパンナコッタ、世界的人気のティラミスでめる。

話題はマッテオのエアフォース時代のモテっぷりに、ラウラの空飛ぶ恋物語。サトルの観光からアクティブスポーツに戦場まで駆けるボーダレスワークだ。

地元民に愛される店内に響くイタリア語に交じって多国籍軍の英会話が際立つ。

エントランス周辺から嬌声が響く。

「FABIO」「FABI」

どうやらスターの来店らしい。

「凜子、イタリア人のプロテニスプレイヤーとそのチームだよ。」

「確か世界ランキングトップ 10 に入る一流プレイヤーだね。」

「彼は世界的なモテっぷりで大人気。ローマオープンに合わせて本戦前に入ってきたんだ。」

彼のチームとともにイタリア人プレイヤーが次々と入店。客には最高のサプライズだ。

イタリア流スローディナーもそろそろ終わり。深夜のナヴォーナ広場周辺はまだ人で賑わう。

「ホテルまでゆっくり歩こう。凜子、ベルニーニの噴水に願い事をするといいよ。この彫刻にはいろいろと逸話があるんだ。」

サトルを真似てコインを投げる。5円玉だ。

穴の開いたコインは世界では珍しく日本の50円玉と5円玉のみだ。海外スタッフに必ずと言っていいほど両替を迫られる。

「ドメスティックに染まらずインターナショナルでいられますように。」

「凜子の願いは面白いね。」

「サトルは？」

「俺は世界各国一通り願いまくったから、もう卒業。」

「SATORU It is good to see again! (また会えてうれしいよ)」

噴水を眺める二人の後方から声がかかる。

振り向くと、俳優かモデル？らしき男性がサトルとハグ。

いいオトコの手は美しい……

「いよいよローマオープンの本戦だね。どう調子は……。」

「だいぶ仕上がっているよ。シングル、ダブルスともに最高位を狙ってる。サトルは撮影に入るの？」

「そのつもり。トーナメントサイドの撮影依頼で。」

「なんとしても勝たないと。こちらの女性は？」

「仕事で日本からきている RINKO。」

「オリエンタルな美しさだね。はじめまして、FABIO です。」

R のアクセントが特徴的なイタリアンイングリッシュ。

「サトルの仕事仲間の RINKO です。」

「ローマオープンにご招待します。後程チケットをホテルに届けます。」

クレイコートのローマオープンは、グランドスラム全仏オープンの前哨戦でランキングに大きく影響するトーナメントだ。エントリーメンバーも超一流で熱戦が続く。

なんてラッキーなんだ！

「凜子、今回のイタリアは超ラッキー！仕事成功間違いなしだ。それに決勝戦まで毎日観戦できる VIP チケット。さすがファビー！最高だよ。」

「RINKO さんのおかげだね、サトル。」

さすが世界一流はやるのが最上級だ。

それに彼そのものが最高級オーラを発している。ベルニーニの魔法か……

凜子は胸の鼓動が速くなるのを感じていた。久しぶりの押し LOVE な高揚感。

レッドクレーの熱戦「ローマオープン」

ローマを中心としたイタリア旅メディアの仕事はすこぶる順調で、残すはローマオープンの取材だ。王道のイタリアツアーとは一線を画し、イタリアにある世界遺産各地のワインとグルメを堪能しながらローマオープンのVIP観戦と玄人向けのプランだ。

ローマオープンのセンターコートは、古代ローマ劇場を連想させる開放的な観戦スタイルが魅力だ。

日を迫うごとに選手の実力が拮抗し、互いに譲らない一進一退の攻防戦が熱い。

打球の音が響く。

素早いステップで追いつき打ち返すスーパープレイ。

200Kを超える高速サーブをレシーブ。

少しの油断も隙も許されない状況に血が逆流するほどの興奮だ。

サトルの友人である FABIO のナイトセッションが始まる。

地元だけあって観衆の応援を独占。

クレーコートがマッチするオレンジのウェアはエンポリオ・アルマーニ。

いち早く相手の弱点を見抜く頭脳プレイと、強烈なフォアのダウンザライン。

自在なコースと回転で相手の意表を突くサーブ。

手脚が長い長身の相手が左右前後に翻弄される。

一流のプレイヤーとはフォームは美しく華麗でいて、球威は力強い。

コートに反響する球音がカラダを揺らす。

「6-3 4-6 6-2」フルセットで FABIO の勝利だ。

オンコートインタビューの最中に凜子に向けて手を振る。

周囲の女性が一斉に飛び上がった。

アスリートの GF ってきつと誇らしく優越感にどっぷり浸れるんだろうな。

「こっちにお手振り？もしかして凜子はファビーのツボにはまったのかな。」

「まさか・・・あり得ない。」

夜は録画で観戦、彼のプレイに興奮して寝付けなかった。

黄色のウェアが眩しいファビオ×ボッテリのダブルスは見事優勝。クレー強者コンビはシングルス疲れも見せずに連覇を遂げた。

呼吸のあったスーパープレイを続出。歓喜するファンで会場は興奮の渦だった。

連日の熱戦、明日はファイナル。FABIO の対戦相手は 14 敗 8 勝のライバルだ。

深夜、会場近くのピッツエリアで興奮冷めやらぬサトルとの夕食を終えホテルに戻る。

ローマはどこで食べてもピッツアが美味しい。生地が絶品だ。

細長いトマトで作るマルゲリータの酸味とバジルの香り、スプマンテでローマを存分に味わう。何よりもサトルのボーダレスな話が最高だ。

部屋に入った途端に携帯が鳴る。

「HELLO,」

「凛子、今日は応援ありがとう」

R が特徴的なイタリアンイングリッシュだ。

「素晴らしい試合をありがとうございました。興奮して寝付けません。」

「まずはダブルス優勝。あとはシングルス。明日必ず応援してね。」

「はい。」

「いつまでローマに？」

「4 日後に帰国します。」

「明日ゲームが終わったら連絡するね。」

「え???? はい。ところでどうやって番号を？」

「サトルだよ。お願いしまくってゲットした。GIVE & TAKE でね。」

「明日、頑張ってください。」

「ありがとう。BOUNA NOTTE ! RINKO 」

電話は切れたが胸の鼓動がおさまらない。

あの一流プレイヤーが何で連絡を？それもただの日本人に……。

世界クラスのもてっぷりスターは面白半分の興味本位、日本人が珍しい？

会話なんて何も覚えていないけど、彼のセクシーボイスが耳に残る。

お願い！夢なら醒めないで……

翌日、アリタリア本社で打ち合わせを終えて会場に向かう。

「昨夜ファビーから連絡あったでしょ。」

「うん、びっくりした。からかわれた気分よ。瞬間の幸せってやつかしらね。」

「いや、かなり本気だったからつい教えちゃったよ。それに彼はいい奴だからね。」

「まあ、ジョークって納得してるから。」

センターコート。大きな歓声に後押しされるように、ファビオが入場する。

そのあとからファビオよりランキングが高いスペインの若手 M.カルロスが入場だ。

対戦成績からみて相手が有利……ランキング 9 位と 3 位の対決だ。

強烈なバックハンドで攻められながら、フォアやドロップショット、ロブなど多彩なテクニックで応戦する。相手の攻撃を読み切ったネットプレイで決める。

1セットはタイブレークにもつれ込む。

コースを狙い分けたファビオのサービスで7-6の僅差、ファビオに軍配が上がった。

2セットは強烈な高速サーブに押し込まれ4-6

ファイナルセットに持ち込む。

双方譲らずの攻防戦に観客は一喜一憂

マッチポイントを握られ、最後はフォアのダウンザラインが僅かにアウト。

脱力したようにコートに座りこむ。

僅差で敗れる悔しさはよっぽどなんだろう、一流のアスリートにしかわからない。

赤土にまみれた彼の姿は最高に美しかった。

ソファで寝てしまったのか・・・携帯の着信音だ。

「はい。」(時差を考えると日本からか・・・)

「俺です。FABIO。もう寝ていたかな、ごめん。」

「今日は素晴らしい試合をありがとう。夢のような1週間でした。優勝、おめでとうございます。そして準優勝、お疲れさまでした。」

「最後が踏ん張れなかったから悔しさが残る。あんな負け方は嫌だ。」

「レッドクレーでプレイするFABIOさんは本当に美しかった。感謝します。」

「美しい？はじめて言われた。RINKO、ローランギャロスで会おう。」

「え???フレンチオープンのこと?今月末の。」

「そう。サトルもプレスで入るし、本戦のチケット贈るから。すぐにでも会いたいけど、これから全仏に向けて調整があるから。」

「なぜ?わたしに。」

「ベルニーニの噴水で会ったから。答えになっていない?」

「うん。」

「今度会ったときに教えるよ。じゃあパリで。」

電話は切れた・・・

これって現実?夢?世界のトッププレイヤーでファンを虜にする彼がわたしを誘う??
ありえない。

帰国当日、アリタリア本社でローランギャロスのチケットとTOKYO-PARIS往復チケットがラウラから渡された。

「これを預かったわよ。必ず凜子に渡すようにとサトルからのメッセージ。」

「サトルは?」

「仕事。パリで会おうって。」

偶然は突然に・・・。@ローランギャロス

5月末から6月初めの15日間、パリのブローニュの森に隣接するスタッド・ローラン・ギャロスで開催されるフレンチオープン。

クレーコートのスペシャリストが優勝の大半を占める特徴的なグランドスラムと言われる。

当然、クレーコートを得意とする FABIO は注目される。

ローマから日本に帰国。5日後にはパリに向かう。

エアフランスのビジネスクラスは、アリタリア以上に快適で凜子のお気に入りのエアだ。

「凜子、またパリへUターンだっけ。」

「ローマでの取材をまとめて編集部に繋いだらすぐに出発よ。」

「また取材？」

「全仏オープンを観戦するの。」

「え????あれってチケットを取るのが凄く大変でしかも高額なんじゃあない？」

「本戦チケットとエアチケットをもらったから。」

「誰に？」

「出場選手によ、ローマで。」

「テレビ観戦して凜子を見つけるね。」

「日焼け防止にサングラスとカミンスキーのハットは必須。それを目印にね (笑)」

「それにしてもエアチケットもなんて……。送り主が気になるなあ。」

「ローマで会ったサトルの友達よ。」

一生に一度あるかのラッキー観戦よ。どんなことをしてもパリに行く。

ローランギャロス セカンドウィーク。

今季絶好調の FABIO はもちろんベスト 16 に勝ち進み、セカンドウィークに突入。

「RINKO、ようこそパリへ。明日からセカンドウィーク。なんとしても勝ち進んでいくよ。」

「チケット、ありがとう。あなたのおかげで一生に一度の素晴らしい夢が見られます。」

「素晴らしい出会いに気合十分だよ。パワー全開で挑むよ。」

ベスト 8 に残るファビオの相手は世界最高峰のクレーキング R.NADAL、世界ランキングは 2 位。対戦成績は 4 勝 16 敗、予想では圧倒的に不利だ。

記者会見では

「クレーキングのラファとの試合はワクワクする。わたしもクレーは得意なサーフェス。チャレンジャー精神で挑むつもりだ。今回は勝利の女神がついているからね。」

「ファビオ、勝利の女神はクルーシートで観戦かしら？」

記者の注目はそこか……。テニス界ぎってのイケメンで女性ファンが多いせいかな恋の噂は毎度のことだ。

「想像にお任せするよ。」

いよいよだ。

先にファビオが入場だ。両者ともに大人気プレイヤー、立ち見の観客も多く溢れそうだ。

何とんでも女性の嬌声が響く。

凜子はクルー席から2列後ろの席にサトルと並んで座る。

大きな帽子とサングラスの完全防備。

「すごい人気ね。」

「ファビオとラファの対戦となれば当然だよ。ファビオの女性ファンは熱狂的だからね。」

カメラは勝利の女神をキャッチするためにクルー席にフォーカスする。

「きっと勝利の女神は女優やモデルって感じの美女ね。」

「普段はそうだけど今回はどうかな。」

壮絶な戦いだったが、地上に舞う赤土と球音が響く黄色い球、そしてスライドするステップがまるでバレエダンサーのように華麗だ。身体の重心が崩れないからだろう、美しいフォームに惹きつけられる。

5-6 6-4 5-7 4-6 ファビオは敗退……。準決勝にコマを進めることはできなかった。

ロングラリーの攻防で、最後は両者ともコートに崩れ落ちるといふ激闘だった。

ナイトセッションが終わりサトルとホテル近くのカジュアルレストランで食事。

ここはマダムがギリシャ人のせいかなオリーブオイルをふんだんに使う魚介レシピが自慢だ。

ワインはライムの柑橘系と春先の花の香りが涼しげなアシルティコ。ギリシャの魚介にはベストマッチ、ムール貝とのマリナーージュは絶品だ。

「ファビオはすぐに帰国するの？」

「テニス選手にオフはほとんどないから、すぐに次のツアーに向けてメンテするからね。」

「あれだけハードに勝ち続けるんだから、賞金が高額なのは当然だね。身体が持たない。」

「食事から日常生活全般にストイックな選手が多いよ。ファビオも派手に映るけど本当は凄くストイックでまじめな奴なんだ。」

「プレイを見て納得。遊び人は無理だわ。ファミリーやクルーも大変だよな。」

「遠征、転戦とハードだしね。」

「私には無理だな。いつも共にいないとね。」

「そうかな……。」

「っていうか縁がないし……。」

世界最高峰を見た！としかいいようがない、素晴らしいローランギャロスだった。

またいつかわたしの最上級ファビオに会えるだろう。

ローマで痛めたひざが悪化したらしく、またタイミングも悪かったのか、最上級の彼とは会話することなく凜

子はパリをあとにした。

届かぬ一流の世界

「凜子、なんでローランギャロスに？テレビ観てびっくり。」

「翔、さすが観てたの？」

「だってVIPシートは必ず映像が流されるしね。サトル？」

「サトルがあの方ビオと友達だったの……。フランス往復のチケットとともに手に入ったからすぐにパリに発ちました。最高だった！なんたって想像もつかない未知の世界だから。世界の一流は天上人だね。」

「来週、こっちに帰ってこない？マイクが遊びに来る。凜子に会いたってリクエストがあったよ。」

マイクは翔の留学時代の友人だ。ロスで一流スポーツ選手のマネージメント会社を経営している。

翔とマイクは大学のアメフト部の花形選手として活躍した親友だ。

「了解。仕事に目途が付いたらすぐに向かうね。マイクも実家堪能型でしょう？」

「そうだ。ホテルは日常だからいやだって。まあ学生時代から俺の家が好きだから。」

ファビオのようなトッププレイヤーの日常を聞いてみよう。

長崎空港に到着。翔のリンカーンSUVに乗り込む。

「マイクは？」

「ハウステンボス。」

「え????」

「ハウステンボスのワッセナーを買うらしい。」

ワッセナーとはハウステンボス内にあるオランダの街並みを再現した別荘エリア。

マンションタイプと戸建てがあり、湾に面してクルーザーやヨットが停泊できる。

「ヨットやクルーザーを停泊できるしマイク好みかな。翔の別荘があるのに。」

「アジアの拠点とか。サッカー選手の欧州移籍が目立ってきたしね。それに俺の隣人になるみたいだ。」

「わたしも住もうかな。夕食は実家ね。」

「料理人を呼んである。」

長崎市内にあるグラバー園近くに凜子の実家がある。丘の上に建つ屋敷は古い洋館で指定文化財、ゲスト専用棟は要人の宿泊に重宝する。

車寄せにマイクを乗せたメルセデスが滑り込む。

「ここは日本とは思えない。凜子、久しぶりだね。」

マイクは凜子に駆け寄りハグ。

「仕事を兼ねての訪日だって。マイクのために世界一美味しい広東料理を揃えたよ。」

「世界一美味しい広東料理をグラバー園の邸宅で食べられる。」

「いつもの部屋に荷物は運んである。今日はゆっくり飲もう。」

凜子のファミリーと広東料理を堪能し、客間のバーカウンターで3人が並ぶ。

マイクはバーボンのソーダ割、翔はモルトウイスキー、凜子はジントニックをそれぞれバーテンダーにオーダー。そして凜子得意のイチジクとロックフォールのブルーチーズにパルマ産のプロシュート、大粒のブラックオリーブが並ぶ。

「RINKO はどこでもこの取り合わせだね。不思議と病みつきになる。前回携帯カメラで保存してから各国のBAR でオーダーしているよ。ホテルだったらだいたい用意できるからね。チェイサーはサンペリグリーノのコンガスがお約束だよね。」

「そうなのよ。これはみんなはまるのよね。マイクもでしょ。翔だってこればかりよ。」

「ハウステンボスに別荘買うの？」

「そのつもり。いまはお買い得だし、コスパいいしね。翔の別荘の隣にした。翔のクルーザーがあるしね。」

「あたしも定住しようかな。」

「マイクに教えて欲しいことがあるの。トップランキングのテニスプレイヤーってオフがほとんどないし転戦しながらポイントを稼ぐ日々でしょう。移動ばかりでどうやって生活しているのかなって。」

「特殊だね。家族のいるトップ10プレイヤーは、ツアーに最適な国に家をいくつも持っている。妻は夫に関わるすべてのスタッフをまとめ、対外的な活動もすべて取り仕切る。トッププレイヤーはボランティアや基金の活動も多いから。子供は専用の家庭教師とともに移動しながら通信教育。常に取り巻きに囲まれた特殊なライフスタイルさ。ただカッコいいから、稼ぐからってだけで寄ってくる世界の美女では到底対処できないね。すべてが夫優先、一心同体なんだ。もちろん妻がプレイヤーの夫も同じ。」

「引退してから、あるいは一線を引いてから結婚する選手も多いよね。」

「現役時代は彼女レベルで十分だよ、世界中に彼女がいるって選手も多いしね。」

「派手な世界の女性であっても、凡人であっても難しい、それこそ幼馴染や同級生、テニスプレイヤー、同業者でないとね。」

「さてはレッドクレアの彼に惚れた？」

「まさか……。わたしはいたって一般人なので。」

「生活のベースを相手に合わせ、彼一色にならないとね。凜子はともかく、献身的な日本女性は向いているかも。」

ここまで否定されるのもなかなかないよな。それだけ特殊だってことかあ。それにあたしには到底届かぬ最上級ってことだ。

ファイヤーオパールに込めて

「凜子、東京に入るからそっちに行ってもいいかな。」

「サトルね、もちろんよ。うちを拠点に動けばいいんじゃない？東京のホテルじゃ仕事モードで癒されないでしょ。マイクもここから飛び回っているよ。」

「マイクが？それはぜひ。明日長崎に入る。」

「迎えに行くね。」

東京入りするマイクを空港まで送ったあとになじみの宝飾店へ。

店内に入るとオレンジ色に輝く石に目が留まる。

「凜子様、お久しぶりでございます。本日はいかがいたしましたか？」

「ティファニーのコード（紐）ブレスを調整して欲しくて。」

「コードのクリーニングもしましょう。」

金属や玉のバングルが重く感じたので、前回長崎に帰った際にティファニーブルーのコードに魅かれてゲットしたお気に入りだ。

「あのオレンジの石は？」

「運命的な出会いを引き寄せる石、ファイヤーオパールです。メキシコ産の逸品で炎を象徴する守護石ともいわれています。」

「ルースを生かしてコードブレスレットにして欲しい。ペアでコードの色はブラック太目がいいかな。」

「贈りものですね。ひとつは凜子様のサイズで。」

「オレンジとブラックのラッピングで・・・贈る相手はイタリア人の世界的アスリートなのでハイセンスに。」

「今日中にデザイン案をご自宅にお持ちします。」

炎の守護石で運命的な出会いか・・・チケットのお返しにファビオに贈ろう。

気に入らなければしなくていいわけだし・・・わたしが確認できるわけでもないから。

まさに自己愛だね

「サトル、またイタリアに入る？」

「うん？ファビーが気になる？膝をスイスで手術して、アマルフィに戻って長期療養と聞いている。全英、全米と今年のグランドスラムは無理かもって。」

「そっか。これを渡して欲しいんだ。チケットの御礼に・・・。」

ダイニングのバーカウンターに並んで座るサトルにオレンジ×ブラックのボックスを渡す。

「中身は？」

「大したものではないから、負担にはならないと思う。」

「わかった。イタリアにすぐ入って渡すね。」

「ありがとう。多分もう会えないと思うので渡しておきたくて。」

「自分で渡せばいいのに・・・。」

「マイクの話聞いて、あまりにも住む世界が違うってわかったから。」
「世界レベルではそうだね。日本やアジアにいるとあまり考えないけど。」
「最上級を知ることができただけでもハッピーよ。」

ブラックのコードに炎色のファイヤーオパールが光る。
レッドクレートの熱量がそのまま肌に伝わる。
どうか捨てられませんか……。
そして最高の夢をありがとう。
凜子の華奢な手首がオレンジ色に輝いている。

エピソード

凜子の携帯にサトルから動画が送信された。

開いてみるとファビオの記者会見のようだ。

サトルのコメントには

「確かにファビーに渡したよ。これエビデンスだから。」

画面のテロップには、膝の治療で今期は療養して来季に向けて準備するとある。

そして記者会見の主演ファビオの左手首に、凜子からのファイヤーオパールが輝いている。

「今期は療養ということですが・・・」

「そのつもりです。療養することでランキングを落とし予選からの戦いとなるとそれなりの準備が必要だからね。膝の手術は無事に成功したよ。回復してからリハビリに入る。」

「スポンサーやウェアの契約も更新されました。全てイタリアを代表するブランドですね。」

「この怪我を機にさらに進化するよ。環境も心境もね。」

「来季へ向けての抱負を聞かせてください。」

「さらにステップアップしたいね。若手の台頭でパワーテニスが主流になりつつあるなか、テクニックと知性を駆使したプレーを磨きたいね。ケガをしない頑丈な身体を作るよ。」

「楽しみですね。」

「俺には炎の守護神が付いているから、期待してね。」

「守護神って????」

含み笑いをするファビオが会見をあとにしながら左手を振り挙げた。

確かにファビオに気持ちは届いたようだ。

来年はさらに強くなったファビオに会いに行こう。

地球サイズの一流に憧れを抱くっていいかもしれない。

読者が選ぶ、押しフレーズ

読者お気に入りのボーダレスなロマンティックシーンをセレクトしました。

夕食は Piazza Navona (ナヴォーナ広場) にあるレストランテ。

マッテオ、ラウラ、サトルとローマの味覚を堪能する。

サルティンヴォッカ、アーティチョーク、スップリ、ニョッキ、牛テールの煮込み、ブルスケッタ。

ワインはフラスカーティにモンテフィアスコーネ、サッシカイア、バローロとワイン好きのチョイス。

食後にアマーロを。

デザートはパンナコッタ、世界的人気のティラミスでめる。

話題はマッテオのエアフォース時代のモテっぷりに、ラウラの空飛ぶ恋物語。サトルの観光からアクティブスポーツに戦場まで駆けるボーダレスワークだ。

地元民に愛される店内に響くイタリア語に交じって多国籍軍の英会話が際立つ。

ホテルまでゆっくり歩こう。凜子、ベルニーニの噴水に願い事をするといよいよ。この彫刻にはいろいろと逸話があるんだ。

さすが世界一流はやるのが最上級だ。

それに彼そのものが最高級オーラを発している。ベルニーニの魔法か……

凜子は胸の鼓動が速くなるのを感じていた。久しぶりの押し LOVE な高揚感。

「レッドクレでプレイする FABIO さんは本当に美しかった。感謝します。」

「美しい？はじめて言われた。RINKO、ローランギャロスで会おう。」

「え??? フレンチオープンのこと? 今月末の。」

「そう。サトルもプレスで入るし、本戦のチケット贈るから。すぐにでも会いたいけど、これから全仏に向けて調整があるから。」

「なぜ? わたしに。」

「ベルニーニの噴水で会ったから。答えになっていない?」

「うん。」

「今度会ったときに教えるよ。じゃあパリで。」

電話は切れた……

これって現実? 夢? 世界のトッププレイヤーでファンを虜にする彼がわたしを誘う??

ありえない。

ブラックのコードに炎色のファイヤーオパールが光る。

レッドクレートの熱量がそのまま肌に伝わる。

どうか捨てられませんように……。

そして最高の夢をありがとう。

凜子の華奢な手首がオレンジ色に輝いている。

含み笑いをするファビオが会見をあとにしながら左手を振り挙げた。

確かにファビオに気持ちは届いたようだ。

来年はさらに強くなったファビオに会いに行こう。

地球サイズの一流に憧れを抱くっていいかもしれない。